【平成28年度 私立学校特別研修会 外国語（英語）教育改革特別部会［東日本エリア(神奈川)］講演】

CAN-DOを日本の英語教育にどう活かすか【講演録】

投　野　由紀夫　東京外国語大学大学院総合国際学研究院　教授

いろいろなトピックについてご関心があると思いますが、CAN-DOというものが最近、この5・6年、じわじわと日本のさまざまな英語教育のコンテクストの中で出てきました。文部科学省では3年前にガイドラインを出して、全ての自治体、それから中学、高校でCAN-DOリストを作成することを薦めて、今年度でほぼ100%、全ての公立学校についてはCAN-DOリストが作られています。ですから、これからはそのようなものを使い、そのようなレベルになっていきます。

それも含めた背景というのか、私は中央教育審議会の専門部会でずっとこのような議論をしていて、今、学習指導要領の改訂作業中も加わっているのですが、GOAL2020という英語教育改革というものが、文部科学省でいろいろなプランを出しています。それを少し自分なりに、このような動きですよということを説明したいと思います。

それからCAN-DOリストがなぜ導入されるようになってきたのかという、その背景について説明します。

別に皆様の今までやってきた実践が全く別のものになるということではありません。CAN-DOリストを加えることにより、さまざまな教え方などが別の観点から再整備されたり、あるいはそういう教え方をリフレクトして良くしたりとか、というような機能があるわけです。そのあたりも後で説明します。

ただCAN-DOリストだけだと、あまりうまくいかないのではないかということが私の個人的な意見です。後半のほうでは、自分がいろいろ研究分野でやっているコーパス分析というものを紹介したいと思います。これは英語の使用された大量のデータをコンピューターに入れて解析するという分野ですが、いろいろな英語を使う運用力に、どのような語彙とか、文法とかというものが関係しているかということを割と科学的に調べたものです。そのようなものを組み合わせていったときに、どういうことが分かるかということをお話ししたいと思います。

最後は、もうかなりプラクティカルに、そのようなことが分かったら、どのように教え、どのようなところに力点を置いたらいいかというようなことの重み付け、そして仕込みと実践がありますが、そのようなことについて、少しコメントしたいと思います。

ではGOAL2020ということですが、英語教育改革。これは発端というか、改革のいろいろなアドバルーンについては、文部科学省がいろいろ挙げているのです。しばらく前に英語が使える日本人というようなスローガンが出ました。このときに英語教員の最低限の英語力は英検で準1級というようなことなどが出た時期です。それからしばらく経ってから5つの提言というものが出て、これは所長中等教育局の国際教育課の中に外国語教育推進室というものがあるのですが、そこがワーキンググループで提言を出したものです。

この5つの提言というものが、今までと何が違うかというと、このワーキンググループの座長は上智大学の吉田研作先生、それから主要な会議にいろいろ出ておられる立教大学の松本茂先生というような方が中心ですけれども、5つの提言が出て、これは時限付きで5年間に1度、リビュー、見直しをし

て、そしてそれに予算を充てていくという形で始まったものです。ですからこの後、提言の1から5まで全て予算化されるようになってます。それまでのスローガンというのは割とアドバルーンは上がるのですが、あまりお金は付かないのです。概算要求などできちんとお金を付けていなかったのですが、ここから以降はお金が付き、調査がきちんとされるようになりました。ですから皆さんが、私学はあまりやらないかもしれませんが、全国調査を公立学校は抜き打ちでやらされているのです。それで、だんだん日本の英語教育で、実際にどのぐらい実力が付いているかということが分かるようになってきたわけです。

この1つ目の提言がCAN-DOに関するものです。生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握、検証する。CAN-DOによる目標設定をしてみてくださいということが提言の1つ目でした。これが平成23年で、5年も前のことです。

その後、矢継ぎ早に幾つか改革の提案が出ます。5つの提言の後、CAN-DOリストのガイドラインの会議というものが始まりました。これは提言1の予算が付いて、実際に会議で、有識者を集めてガイドライン作ったのです。この会議にも私は出ていました。

この後、CAN-DOリストを作りましょうと、ガイドラインが2013年3月頃に発表になった。その直後にTOEFL大学入試騒動ということを覚えていますか。国会議員から「大学入試にTOEFL」をという提言があり、文部科学省が急にバタバタして、CAN-DOリストよりも先に入試改革のいろいろな答申を出すようになったのです。それで大学入試改革のさまざまなコミッティーが開かれ、どのようなことに現状の入試の問題点があるかというようなことについて話をしたのです。

それを機に総合的な改革案として2013年12月に出たものが、グローバル化に対応した英語教育改革実施計画というものです。

グローバル化ということで、どのようなロードマップを敷くかということですが、これが有名な表ですけれども、ここで初めて、2020年までに学習指導要領の改訂によって、大きく分けて3つ変更点を設けるということを決めました。

一つは現状の小学校5年生から始めている英語を3年生から始める。5・6年では教科に変えるということです。もうこれは既に決定しています。ですから小学校では5・6年生は週に2時間、英語を正式に教えることになります。これは全ての公立の学

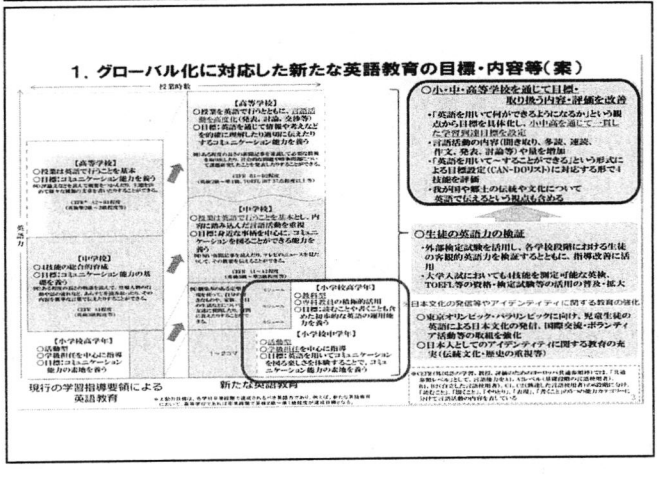
「5つの提言」（平成２３年７月）

- 国外共通語としての英語力向上のための５つの提言と具体的施策
- 初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室
- http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/07/__icsFiles/afieldfile/2011/07/26/1308888_1.pdf
- 提言１：生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する
  - CAN-DOによる目標設定を自治体ごとに作らせる動きに
- 提言２：生徒にグローバル社会における英語の必要性について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る
- 提言３：ALT, ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす
- 提言４：英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る
- 提言５：グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る

グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（２０１３年１２月発表）

- http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343704_01.pdf
- ５つの提言の後、CAN-DOリストのガイドライン会議（提言１の具体化）がなされた後
- TOEFL大学入試騒動（2013年春）を受けて、文科省が大学入試改革案を優先
- それをもとに総合的な改革案として提示されたもの

1. グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方
2. 新たな英語教育の在り方実現のための体制整備



校です。皆さんのお勤めの私立の学校だと、もう小学校からやっているような学校はあるかもしれませんが、公に学習指導要領上で決まります。

そして早めに始める部分ですが、今行っている5・6年の活動に当たるものを3・4年で行います。ですから、3・4年から親しませ、5・6年でしっかり週2時間くらいで行い、4年間くらいで基礎的な素地をつくって中学に渡すということです。

中学は、今度は大変なのですが、常にある程度、習った子どもたちを受け取って教えることになります。ですから、中学校の教科書はガラッと変わります。恐らくガラッと変わります。そして中学のレベルの上のほうは、現状の高校1年くらいのレベルのものまでを扱う教科書が出てくるはずです。つまり真ん中辺は、少し高度化するのです。そして最後、最終到達点を上げたいということです。ですから今の私立の学校のトップクラスの学校が目指しているような部分などが、高等学校の3年生のカリキュラムなどに部分的に反映されるような感じになってきます。

今、私が言った3つのポイントというのは、1つ目が小学校です。2つ目は出口です。出口の部分は入試改革が出ていて、入試改革については4技能を測定可能な英検、TOEFL等の資格検定試験を活用してはどうかということが、この時点のグローバル化のときに出ていた案です。

その後、いろいろ変更があって、今、テストに関しては高校2年レベルで基礎学力テスト（仮）を行うという話が出ています。これは必履修科目になる1年生のときの英語の高校の科目が終わったくらいの力を測るテストです。中学校と高校1年くらいのレベルの内容を測るテストをまず行い、そこで大体どのくらいできているかということを測るという、これは現在やっている全国調査を公式化するものなのです。公のものにするのです。それが1つ、そしてあとは大学入試を変えると今言っています。その2刀流で行くと、出口も変わる。

今後の英語教育の改善・充実方策について
報告（概要）～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～

- 平成２６年１０月　初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室
- http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm
- 改革１：　国が示す教育目標・内容の改善
  - 「英語を使って何ができるようになるか」という観点から一貫した教育目標を示す
- 改革２：　学校における指導と評価の改善
- 改革３：　高等学校・大学の英語力の評価および入学者選抜の改善
- 改革４：　教科書・教材の充実
- 改革５：　学校における指導体制の充実

真ん中は、どう変えるのか。先ほど言ったCAN-DOで小中高とつなぐということです。これは初めてですが、学習指導要領で、以前までは縦割りで小学校、中学校、高等学校、全然別々に作っていたのです。今回は小中高と串刺しにした目標設定というものを考えています。ですから、ずっと英語が身に付いていくというステップのようなものを小学校でも中学校でも高校でも共有化しようというようなことでCAN-DOというものが言われています。その辺りが出てきたのが、このグローバル化という2年前くらいです。

それで平成26年10月、新たな5つの提言という形で出てきました。このときに国が示す教育目標内容の改善ということで、英語を使って何ができるようになるかという観点から、一貫した教育目標を示すということが唱われました。これが、いわゆるCAN-DOということを言っていたわけです。

このような矢継ぎ早のさまざまな改革案の裏側というか、どのような背景があるのだろうということを少し見てみましょう。

一つは皆様もよくご存じのとおり、グローバル化です。新しい5つの定義がありますが、認識的には

国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要で、アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべきだと。今後の英語教育改革においては、その基礎的、基本的な知識、技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、これが、今回の学習指導要領では全教科で言われてることです。思考力、判断力、表現力。知識技能をどう使うかっていうことについて、かなり育成に重点が置かれるっていうことになります。

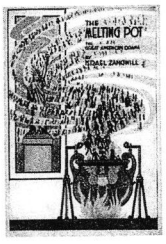
背景１
グローバル化

・グローバル化の進展の中で、国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって極めて重要である。アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。
・（平成２６年「新５つの提言」背景）

この背景は、やはり未来の日本ということなのです。まずオリンピックがあります。オリンピックは中間点なのです。2050年頃には、かなり多言語化、多文化社会になるのではないかという国の予測があるわけです。現在も、どんどんたくさんの外国人の観光客が来ています。もう周りで外国人を目にすることがそんなに珍しくなくなってきました。住んでいる人も多くなっています。皆さんのコミュニティーでも外国人の方が近くに住んでいるということが多くなってきているのではないでしょうか。国は、こういう危機意識を持っているのです。　例えばシャープが、台湾の会社に買われてしまったとか、どんどんグローバル化していくと、もうマーケットがシームレスになってくるので、日本がそういうコンペティションを他の国とやっていくために、今までのような感じの国内マーケット重視のものでは駄目だという認識です。韓国は、もう10年以上前に、そのように切り替えて、国内の人数が少ないからどんどん外に売るようになっています。日本も一時期、そのように頑張ってやっていたけれども、日本はブランド的にはどんどん高級になって、高くなって売れなくなってしまいました。だからすごく良いものだけれども値段が高いということで、白物家電などは、もう軒並みインドとか中国とか、そのような所の商品になっています。ですから、もしかすると将来英語が使えないと、皆様は構いませんが、我々の下の世代や孫の世代が、とても困る時代になるのではないかという認識なのです。これはやはり私も英語教育をする立場として、経済だけが全てではないけれども、しかしやはり国力が落ちてしまうといろいろな面で不便になります。ましてや外資がいろいろ入ってきて全部外国中心になってしまったら、せっかくの日本の良いところがどんどんなくなっていってしまうと思います。心配なことも多いわけです。ですからやはり我々は、少なくとも私たちの子どもたちや孫の代が、しっかりそのような力を付けて、このような部分を生き抜いていけるように、何とか今変わるべきところを変えていかければということです。

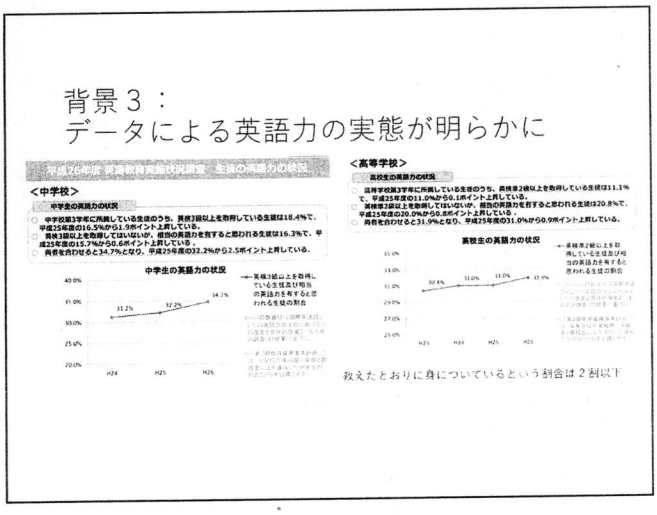
背景２
オリンピック、そして未来の日本

・我が国では、人々が英語をはじめとする外国語を日常的に使用する機会は限られている。しかしながら、東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020（平成32）年はもとより、現在、学校で学ぶ児童生徒が卒業後に社会で活躍するであろう2050（平成62）年頃には、我が国は、多文化・多言語・多民族の人たちが、協調と競争する国際的な環境の中にあることが予想され、そうした中で、国民一人一人が、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが想定される。

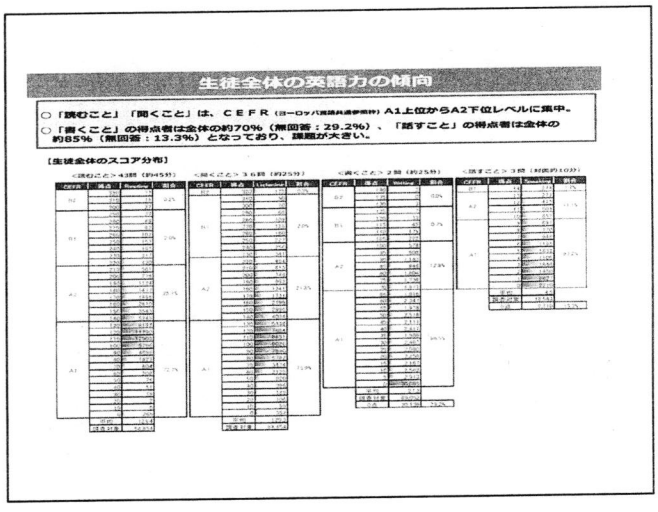


三つ目は、我々は一生懸命教えているけれども英語力は付いていないということです。こちらのデータを見てみますと、中学校、高校のかなりの人数で行っている調査です。昨年度ですが、6・7万人というランダムサンプリングの調査を国が行っているのです。そういう調査でやっていることは、大体このようなことです。教えた通りに、大体その教えたレベルのことができている子は2割以下です。こちら

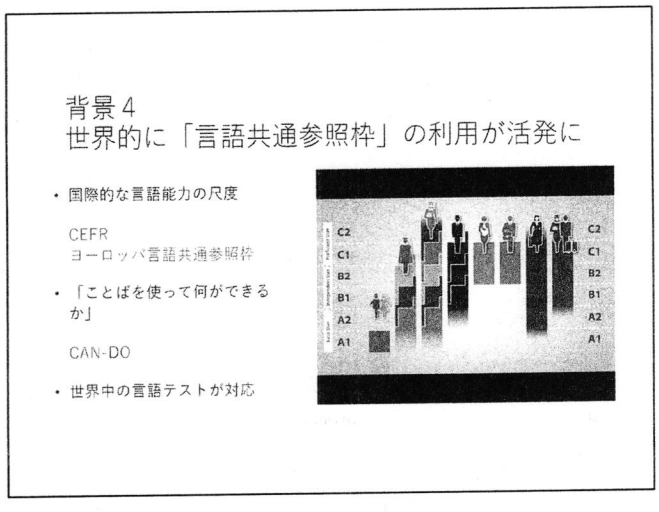
の中学生を見ますと、英検3級というのが大体中学3年のレベルを測っている点数です。できている、取得している生徒は18%です。相当する英語力を持っていそうな子を合わせると大体30%くらいなのです。ですから受けてはいないけれども取れる力を持っているような人です。高校はどうでしょうか。準2級を取っている人が11%。皆様の学校ではもっと高いかもしれませんが、全国でならすとこのような感じです。ですから、私たちはインプットとして挙げているレベルは高校3年生レベルでも、読むレベルに関しては中3くらいの力です。話す力に至っては中1、中2レベルの英語しか出てこないというのが現状の高3生です。そのようなレベルの英語の身に付き方になってしまっているということです



なので、こういうことを現在、国は、B1、B2とかA2というような、CEFRというヨーロッパ言語共通参照枠に照らしても出しているのです。そうすると、相当にギャップがあるということが分かってきています。つまり、我々は特に発信能力が弱いのです。書くこと、話すことが。表の大体A1の上くらいに山が来ていますが、一番下のA1が多いです。このように発信能力についてはとても低いレベルです。つまりそういうことに慣れていない。教室の中で、そういう発信をするような力が付くように、指導がなかなかできていないということです。これは国のいろいろな、日本という島国の特性などいろいろあるかもしれないけれども、それにしても週に4・5時間教えて、これだというわけです。かなり能率が悪い。実際に、もっとできるはずのことをきちんとやっていないのではないかと思われても仕方のないような数値になっているわけです。

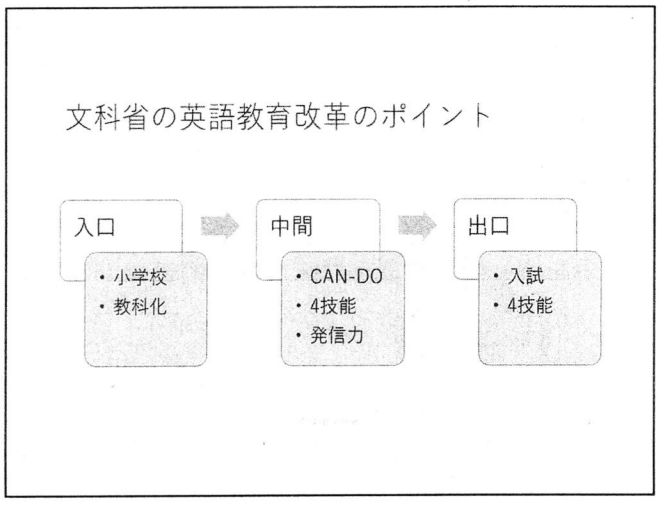


背景の4つ目は、世界的にこの言語共通参照枠の利用が活発になっているわけです。国際的な言語能力の尺度として多言語で、いろいろな言語で、この共通尺度を使うようになっています。今までバラバラだったテストも全部、今CEFRを基にしてアライメントというのですが、対応付けをするようになっていて、世界中の何十という言語の言語テストがCEFRに照準を合わせて作られるようになってきているのです。



というわけで、文部科学省の英語教育改革のポイントは、この3つです。入口、真ん中、出口。ですから、かなり包括的な改革だということが言える

と思うのです。うまくいけば、いろいろなスイッチをひねっているところがうまく一致すれば、かなり期待できると思います。しかし逆に言うと、こういうところのスイッチをひねり間違えたり、うまくいかなかったりすると、かなりの混乱が予想されます。ですから、私学の場合は、同じ生徒たちを、例えば小中高と教えたいというような環境があるところもあります。



そういうところには逆に言うと、こういうシステムは割と親和性があるのです。私立の場合、一貫で教えられますから。ですから、そういう部分に今、行きつつある、このような波のようなものをうまく受け止めて、どのように私立の中で仕組みをつくるかというような、そのような部分というのはかなり重要だと思います。ですから、そういうことを少し考えながら話を聞いてほしいと思います。

平成27年6月に生徒の英語力向上推進プランが出されました。これは達成状況を毎年公表して計画的に改善を推進するというものです。フィージビリティー調査と言って、昨年と一昨年と、毎年少しずつ達成状況の調査が始まっています。これも予算が付いています。ですから、かなり文部科学省は本腰を入れてやり始めているわけです。

それでは、先程から出てきているCAN-DOのことを少し中心に話します。CAN-DOは、なぜ必要なのかという幾つかの理由を見ていきたいと思います。

CAN-DOの源流というか、これができるということはLearning Objectiveと言うのです。学習目標といって、これはアメリカなどではPerformance Objectiveと言うことが多いのです。つまり表面に出てくる、できることを、能力を顕在化させてみたときに、どのように表面に出てくるかということをパフォーマンスで見る。そして、昔のBehaviorismを皆様は知っていますか。行動主義と言われていた心理学が流行っていた頃に、教育の測定というものは目に見える、外に出てくるさまざまなパフォーマンスで測るという考え方があったのです。中にあるメンタルがいろいろな能力を見るというのではなく、それが外側に発現されてくる様子で見るということです。そういうものの流れと少し違うヨーロッパ系のものですが、考え方は似ています。その源流は、このCEFRにあるわけです。世界の外国語教育の枠組みとして国際標準になりつつあるということです。

CEFRというのはCommon European Framework of Reference for Languagesという、Learning、teaching、assessmentというものです。Council of Europeという欧州評議会に外国語政策部会というところがあり、そこで外国語教育、カリキュラム構築とその評価検証にCEFRを使いましょうということを公式に決めたのです。2002年1月です。

CEFRそのものは、実はかなり歴史的な経緯があります。最初は70年代。皆様の中でもし英語教育の歴史に詳しい人がいれば、この頃はノーショナル・ファンクショナルシラバスという、機能概念シラバスというものが文法シラバスに取って代わる形で出てきたわけです。70年代というと、皆様は知っているでしょうか、スティーブン・クラッシェンという人が、アメリカでモニター理論とかインプット理論を提唱し始めた頃です。80年の初めくらいです。その前、60年代はエラーアナリシスなどを盛んに行っていました。ピット・コーダーとか、そのような人たちです。Interlanguage、中間言語という、

学習者の中間的なグラマーを記述するような研究が当時多くされました。そのようなものを受けてコミュニカティブアプローチというようなものが出てくる頃です。その頃に、文法中心のシラバスだけだと駄目で、文法が結果的にコミュニケーションにどう役立つのかという部分を基にしたシラバスを作ろうという考え方です。それによって、人間の世界を表すときの概念と、そういう概念を基に自分が言葉を使って何をするかという機能面を重視したようなシラバスが当時作られたのです。これを主導したのがvan eckという人です。このvan eckがCouncil of Europeの機関で最初に『Threshold Level』という本を書きました。これは英語で言うと、しきい値、閾値という意味なのです。いき値というのは、そのthresholdを超えると何かが変わるという意味です。何が変わるのでしょうか。ある程度、その言語を使って自分で独り立ちができるようなレベルというふうに考えているのです。

教育を経てからそうなる場合もあるし、移民のように使いながら身に付ける場合もありますが、少なくとも自分である程度、自立的に言語を使え、そこから先は先生が要らない、学校が要らないようなレベルになるというのが、これがthresholdです。ここから先にいくと、もう自立的なユーザーになるのです。そのために必要な言語機能と概念は何かを細かくリストしたのが、『Threshold Level』という本です。この本を基に各国語版ができたのです。約20カ国の20言語くらいが翻訳されています、当時、80年くらいなので、最初は大体、言語教育であればどのくらいの力を付けてあげればいいのかというような細かいインベントリーが先にあって、そのインベントリーを各国版にしてヨーロッパでは使っていたのです。ケンブリッジがこれを測るテストを作って、それのテストを作りながら、ここまでいくまでのときも作ろうというので90年に改訂され、90年に改訂されたときに1個下のレベルができました。そうやって少しずつ上下を作っていき、このようなテストが広がってきたのです。これを言語共通にするために、今のCAN-DOというような能力を記述するものに抽象化したのです。今まで、さまざまなインベントリーを各国語で持っていたのですが、それだと細かすぎてしまうので、全員で共通で使うために全ての言語共通の文言にして、このA1からC2までのレベルをキープしながら、それぞれの記述を能力的にする、できるという文にしたわけです。それがCAN-DOリストです。CEFRというのは、そういうCAN-DOリストの形でA1からC2までの6レベル、かつ5技能、アンダースタンディング、スピーキング、ライティングで、面白いことにスピーキングがスポークン・インタラクションとプロダクションに分かれています。一方的な発表技能、モノログの発表技能とインタラクション。相手がいて双方向でやるという、そういうものを分けているのです。それにライティング、リーディング、リスニングの5技能で分割しています。これでCAN-DOリストを作って、それを全ての言語で使うということなのです。文法の文言はほとんど出てきません。普通の人が読んだときに、自分は言葉であればどのようなことができるかを読んで、この辺まではできる、それを見て、ある程度判定できるような文になっています。こういうものをセルフアセスメントと言うのですが、自己評価をするために全体像を見渡せるような表になっています。そのようなものをCEFRは公表しています。

CEFRの根幹
- 大量のレベル別can doリスト
- 言語共通に「ことばで何ができるか？」を組織的に記述

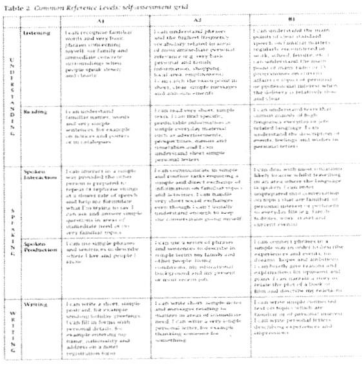
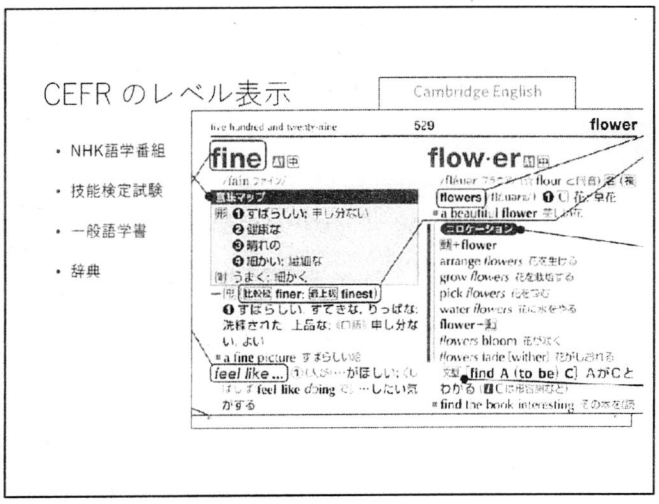


Table 2 Common Reference Levels: self-assessment grid

		A1	A2	B1
UNDERSTANDING	Listening	I can recognise familiar words and very basic phrases concerning myself, my family and immediate concrete surroundings when people speak slowly and clearly.	I can understand phrases and the highest frequency vocabulary related to areas of most immediate personal relevance (e.g. very basic personal and family information, shopping, local geography, employment). I can catch the main point in short, clear, simple messages and announcements.	I can understand the main points of clear standard speech on familiar matters regularly met with in work, school, leisure etc. I can understand the main point of many radio or TV programmes on current affairs or topics of personal or professional interest when the delivery is relatively slow and clear.
	Reading	I can understand familiar names, words and very simple sentences, for example on notices and posters or in catalogues.	I can read very short, simple texts. I can find specific, predictable information in simple everyday material such as advertisements, prospectuses, menus and timetables and I can understand short simple personal letters.	I can understand texts that consist mainly of high frequency everyday or job-related language. I can understand the description of events, feelings and wishes in personal letters.
SPEAKING	Spoken Interaction	I can interact in a simple way provided the other person is prepared to repeat or rephrase things at a slower rate of speech and help me formulate what I'm trying to say. I can ask and answer simple questions in areas of immediate need or very familiar topics.	I can communicate in simple and routine tasks requiring a simple and direct exchange of information on familiar topics and activities. I can handle very short social exchanges, even though I can't usually understand enough to keep the conversation going myself.	I can deal with most situations likely to arise while travelling in an area where the language is spoken. I can enter unprepared into conversation on topics that are familiar, of personal interest or pertinent to everyday life (e.g. family, hobbies, work, travel and current events).
	Spoken Production	I can use simple phrases and sentences to describe where I live and people I know.	I can use a series of phrases and sentences to describe in simple terms my family and other people, living conditions, my educational background and my present or past job.	I can connect phrases in a simple way in order to describe experiences and events, my dreams, hopes and ambitions. I can briefly give reasons and explanations for opinions and plans. I can narrate a story or relate the plot of a book or film and describe my reaction.
WRITING	Writing	I can write a short, simple postcard, for example sending holiday greetings. I can fill in forms with personal details, for example entering my name, nationality and address on a hotel registration form.	I can write short, simple notes and messages relating to matters in areas of immediate need. I can write a very simple personal letter, for example thanking someone for something.	I can write simple connected text on topics which are familiar or of personal interest. I can write personal letters describing experiences and impressions.

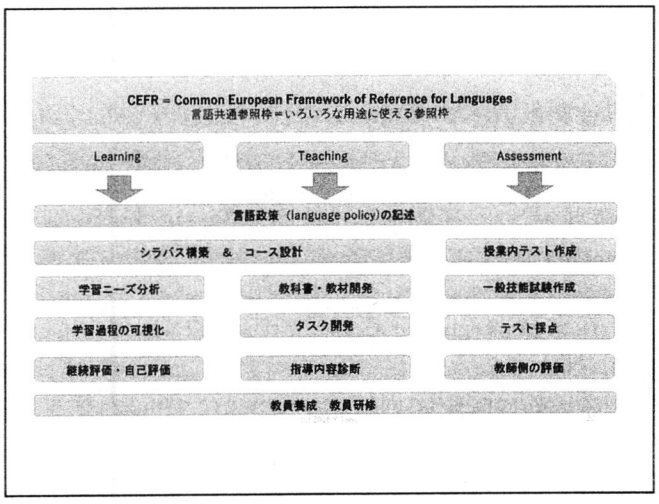
これを機に、日本でもさまざまな導入の影響というものが出てきているわけです。例えばNHKの語

学番組は現在、全てCEFRでポジショニングがされています。皆さんは気付かないかもしれないけれども、例えば私は今、ラジオの基礎英語を担当していますが、基礎英語のA1レベルの上の方という形の位置付けです。それからあとA2レベルに入っているという感じの枠組みになっています。それからあとラジオ英会話辺りはB1レベルになっています。そんなようなポジショニングに使っています。



いろいろなテストは、このケンブリッジ英検が一番CEFRの基の代表的なテストですが、これは大変長いテストなのです。ですから、さまざまな英検もベネッセもTEAPなども全部、このCEFRレベルでは、「うちのスコアはここからここまでがここに当たります」というようなことの、対応付けを発表しています。

それからさまざまな教材にもCEFRレベルが貼られています。学習する内容にA2レベルとか貼ってあったりします。私が監修している『エースクラウン』という辞書では、単語にレベルが貼ってあるのです。A1とかA2と。私の作っているCEFR-Jという枠組みがあり、そのCEFR-Jの枠組みで独自に作っている語彙表があるのですが、その語彙表のランキングが貼ってあるわけです。



CEFRは共通の枠組みで、何か指導法を強制するものではないのです。理念としては、考えるための道具として使ってほしいというような意味合いです。ですから、どのような用途に使っても構わないのです。CEFR自体は汎用枠なので、先生方の自分の置かれている環境のニーズに合うように、自由に利用してほしいという、そのような枠組みです。ラーニング、ティーチング、アセスメントとあるように、それぞれの部分で使える内容がさまざまに分かれていきます。学習上は当然、大きくはシラバスを作ったり、コース設計したり、国の言語政策の記述などを大きくするようなものにも使えるし、もっとミクロに見ると、自分たちの学習者のニーズ分析や学習過程を可視化したり、それから継続評価、形成的な評価、自己評価のようなものにCAN-DOを使うということが、もうクラスの個人レベルで出てきます。個人の学習者のポートフォリオなどという部分になってくると、もっと個人的なものとして使ったりします。

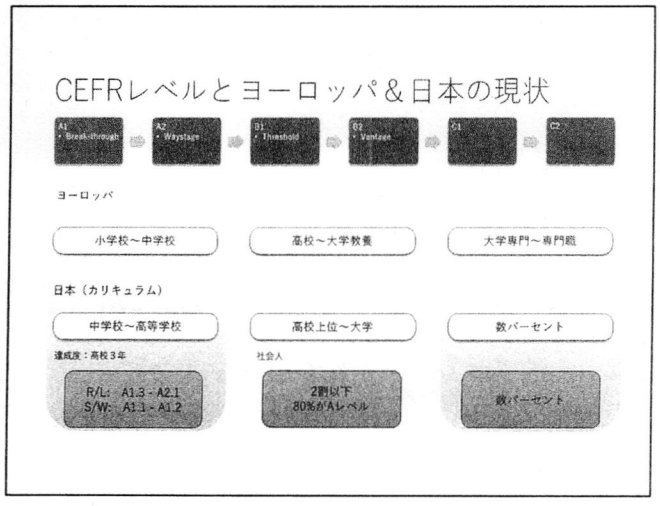
ティーチングのほうでは教科書や教材の開発、タスク開発、指導内容の診断などに利用できるわけです。

そしてアセスメントのほうでは授業内テスト、パフォーマンステスト、それから一般の技能検定試験、採点、教師側の評価のようなことに使います。インタビューテストなどにもそういうものを使う人もいます。当然、教員養成やトレーニングなどにも利用できるということです。

このように汎用枠なので、さまざまな用途に使って、一部分しか使わないところもあります。例えば

小学校とかキッズスクールのような外国語教室は、このA1レベルの一番下のほうの部分しか使わないとか、そのようなこともあり得るわけです。このように用途はいろいろです。

CEFRレベルでヨーロッパと日本の現状というものを見ますと、A1からC2までいきますが、ヨーロッパでは大体、ざっくりした話ですが、A1、A2レベルは小中で大体教えます。そしてB1、B2が高校から大学教養です。B 2レベルが、B1がインデペンデントユーザーと言われますが、B2レベルになるとVantageといいます。Vantageというのは見晴らし台という意味です。Vantage Pointといいますが、そこに立つと少し高い所から見えるという感じになるわけです。つまり能力が高くなってきて見晴らしが良くなるというようなもので、そのようなレベルだという意味で付いています。Vantageというのは、その英語を母語とする国の大学で、教養レベルの大学の授業が無理なく受けられる程度の英語力です。ですから、先生方の学校の高校生の生徒が、すぐそのままIBなどを取って外国の大学に進学できるようなくらいのレベルがB2レベルです。そのようなイメージです。日本のカリキュラムは現在 、A1、A2は高等学校くらいまでがずっとカバーしています。高等学校の上位校はB1レベルをカバーし、B2レベルくらいまで内容が進んでいる学校もあります。テキストの難しさ的には。それで身に付いてるかというと、少しそれは難しい。インプットはしているけれども、出てくるまでにはなかなかいってないところ多いと思います。時々ものすごいバイリンガルの教育を行っているような私立学校などがあって、そのような学校は少し特殊に、IBで外の学校に行かせるようなところもあるかもしれません。しかし大変少ないです。どのくらいできているかというと、先程のように、スピーキングに至ってはA1のボトム、それからリーディングやリスニングはA1の上位からA2の上位くらいまでが高3の段階での達成度なのです。ですからあまり達成度は高くないです。社会人に至っては、私と同僚の根岸教授が調べた調査によると、大学を出ていても一般の日本人の8割はAレベルというような調査も出ています。ですから、我々はあまり、普段の人たちは使わない。Cレベルはオキュペーショナルといって職業に使うのですが、数%くらいではないかと言われています。



CAN-DOが、なぜ使われるようになったのか。国際的な枠組みの影響に加えてさまざまな利点があるようです。一つは、CAN-DOによる目標設定を行うことで、先生や生徒の目標の捉え方を変えたいというような意図が文部科学省にやはりあるわけです。今までコミュニケーション能力、いろいろな用語を使って、そういう4技能をバランス良くということは唱ってきているわけですが、相変わらず文法偏重の授業です。文法が必ずしも悪いわけではないです。私は文法も語彙も、とても重要だと思うのですが、やはり時間のかけ方を間違えている。全体的に、もうとにかく文法の説明ばか

理由２：

•CAN-DOによる目標設定

→ 教員・生徒の「目標」の捉え方を変えたい

→ 文法解説偏重の授業から「ことばを使う」授業へ

りする先生が多いのです。そのほうが楽だからです。準備をしないで、その場で話せるといった感じです。そのようなことが結構多い。忙しい先生たちは予習をしない。レッスンに入ってくると、その場で読ませて訳させたりして、それで適当に文法の説明をすれば1時間が終わるというように思って教えている人が案外多いのです。皆様は、そうではないと思います。だから文法解説偏重というものは、これは日本の教え方の大変な固まりの部分です。悪くはないが、あまり固まりすぎるとよくない。何とかしないと。そこを砕いてもう少し違う形にしないと、教育が非常に固定化してしまう。そういう教え方の先生たちに力が付いていると思っている生徒はほとんどいないです。つまり生徒が聞いていてもどのような授業をしているのか分からなくなってしまう。ぼーっとして30分が過ぎてしまいます。受け身の授業です。発言の機会が全くない。たまに回ってきて1回指されて、その問題の解答を答える。そのようなことでは、もう英語の力は全く付かない。中学から高校に向けて、教科書をそのようにろくにやってないと、高校に入ってからはグンとレベルが上がってしまいます。後でテキストの分析をした結果を見せますが、そういう子どもたちが文法訳読などを行うと、もう暗号を解読しているようになります。だからテストも日本語の和訳のほうを覚えてテストをするという子どもも中にはいて、そのような勉強法自体が根本的におかしいということを先生は知らない。こういうところは言葉を使う授業にシフトしていかなければいけないということです。

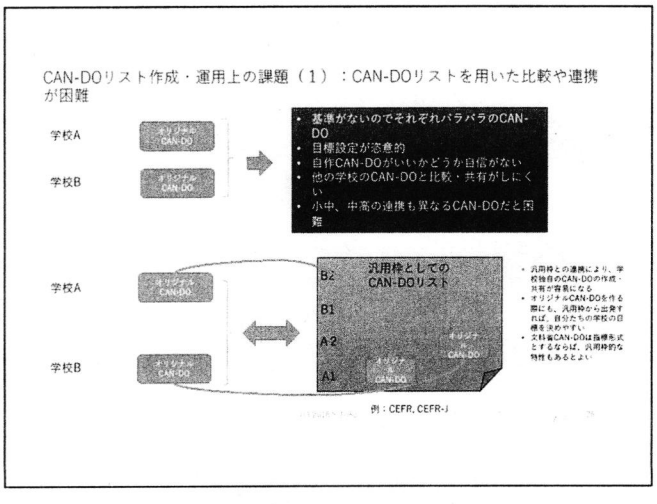
理由3：

•CAN-DOによって

小中高大　連携

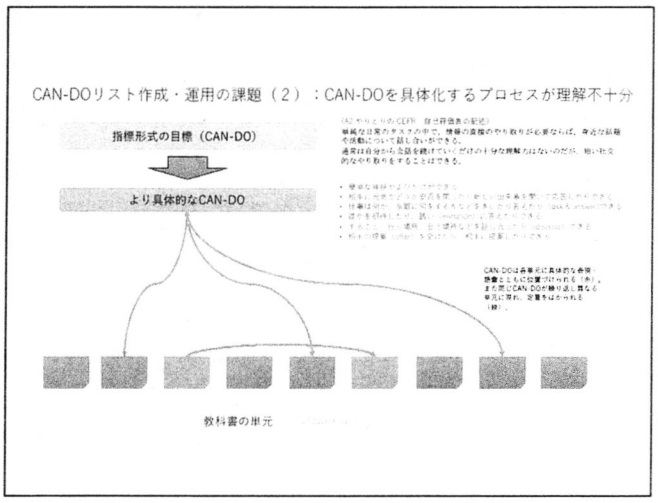
の統一目標を示したい

3つ目の利用。CAN-DOによって、小中高大を何とかつなげるようにしたいわけです。現場の改革が、いろいろなスイッチをひねってしまっているので難しいわけです。そこを何とか小中高大の連携で統一目標を示したいという思惑があるわけです。ガイドラインが3年前に出て、各校がCAN-DOを作りました。しかし幾つかの問題がありました。それは何かというと、学校ごとにそれぞれCAN-DOを作りますが、全体の統一の枠組みがない場合、各学校はかなりバラバラにCAN-DOを作ってしまうのです。また基準がないから、どういうCAN-DOが良いCAN-DOか分からないわけです。そうすると、CAN-DOの作り方なども恣意的です。他の学校のCAN-DOと、自分の学校のCAN-DOと、どこが一致しているかも分からない。そして自分の学校のCAN-DOで、他の学校に「これできるよ」と言って渡したけれども、他の学校にとって、それがどういうことができるかの一致ができない。そのような問題点がいろいろ出てきました。そうなると、小中や中高の連携も形ばかりになります。



これは何がいけないのかというと、ここにあるような汎用枠を基にして作っていないからです。汎用枠の大きな枠組みを参考に、それを具体的にするようなCAN-DOを作らないことにはうまくいかないのです。ここにあるようなCEFRのようなものが必要なのは、こういうものを使うことで、うちのオリジナルのCAN-DOは、この位置です

と。私の所のは、ここの位置ですというように、大枠を基に共有できるようにしておけば、それはそれなりに意味があるわけです。このように汎用枠としての CAN-DO リストに近いものを文部科学省は今、学習指導要領の目標として、指標形式の目標という名称で作ろうとしています。これがうまくいってほしいと思っているわけです。



もう一つ CAN-DO リストを作っていて先生方が迷うことは、作り終わったけれども、どうも使い方が分からない。「できる」というリストがたくさんできたけれども、これをどうすればいいのかというような話があるわけです。

CAN-DO リストは、実は指標形式の大きな目標から教科書のユニットの言語活動までは距離があるのです。この距離を上手に埋めてあげる必要があります。どのようになっているかというと、CAN-DO 自体は比較的、抽象的なので、それをもう少し細かく具体的にすることがよく行われていることです。これはヨーロッパで行われているポートフォリオというものに落とし込むときに、それぞれのレベルに合った CAN-DO をもう少し詳しくします。詳しくする中で具体的な文法や語彙と貼り付けられるものを貼り付けていきます。後ほどそのことについては簡単に説明できれば説明したいと思います。

このようにやることによって、現状の教科書で教えている内容と、少し具体的な CAN-DO がひも付き、それを繰り返しているうちに大きな目標の CAN-DO ができるようになっていくことに結び付いていくというような感じの設計をすることになります。

今、改訂されている学習指導要領を基に教科書が作られることになれば、教科書がおそらくある程度はこのようになると思います。先生方がこのようなやり方について、研修等で知っておくと、ご自分でもいろいろな工夫が可能になるのです。このことについては本日は十分話せないかもしれません。

理由の一つとして、今、目標設定を共有化するという話をしています。ですから教科書で行っているねらいや目標のようなものと CAN-DO のひも付けのようなものもできるようになれば、大変有効に使えるということです。そういうことが、まだ少し先生方の理解が得られていないために、「作ってはみたものの」という状態になっているわけです。

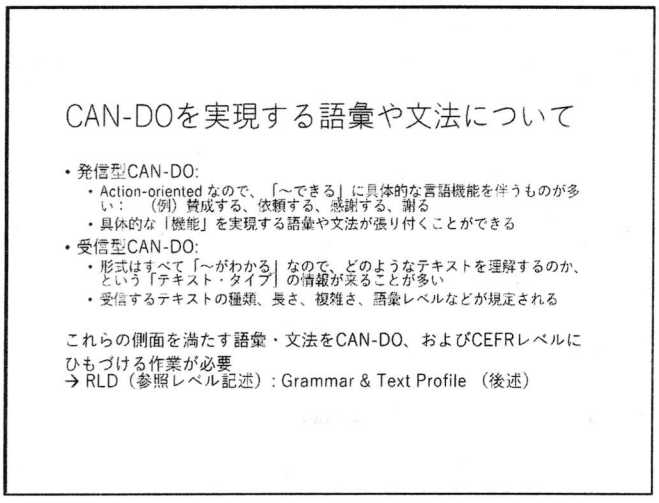
理由の 4 つ目は、先ほどのことと関連していますが、CAN-DO を使うさまざまな環境が整ってきているということがあります。CAN-DO と文法語彙の連携、CAN-DO と接するテキストの特性、このようなものについての理解がかなり深まるようになってきています。もう少し説明すると、CAN-DO は当然 5 技能です。5 技能のうちの読むことと聞くことは Understanding といいます。これは受信型の CAN-DO です。それに対して話すことと書くことは発信の CAN-DO です。自分から出していかなければいけない。この CAN-DO には言語機能の貼り付けに大きな違いがあります。

理由４：

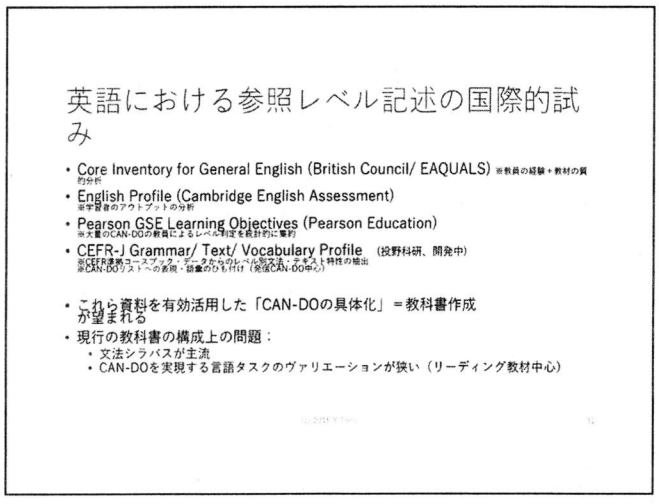
•CAN-DO 活用がしやすい環境が整いつつあるから

•CAN-DOと文法・語彙の連携
•CAN-DOと接するテキストの特性

発信型の CAN-DO というのはアクションオリエンテッドといって、行為をする、それを言うことによって、ある行為をするというタイプのものが多いのです。ですから、例えば賛成する、依頼する、感謝する、謝るというように、自分が言葉を使って何ができるかを記述する文に表現が貼り付きやすいのです。例えば賛成するのであれば、どのようなことを英語で言うかと想像します。謝るならどのように言うかのフレーズが浮かんできます。そのようにすると、言語機能を実現する語彙や文法は貼り付きやすいのです。でも受診型はどうでしょうか。新聞記事を読み、内容を捉えるというような CAN-DO だとしたら、どんな文法が貼り付きますか。分かりにくいですね。それはなぜかというと、受信型は「分かる」なので、どのようなテキストを理解するのがいいかというテキストタイプの種類なのです。例えば新聞であるとか、手紙であるとか、広告であるとか、掲示板であるとか、そういうテキストタイプが来ることがメインで、文法に関連するようなものというのは、あまり発信型のようには浮かんでこないことが多いのです。この 2 つの特徴を上手に使って文法や語彙を貼り付けることが大事です。つまり発信型の CAN-DO にできるだけ語彙文法を貼り付け、そして受信型のほうはテキストの種類や長さや複雑さ、それから語彙の難易度レベルのようなものでレベル調整をするというわけです。このような仕組みを我々のさまざまな CEFR を使っている研究では具体的に行っています。



具体化についてですが、CAN-DO リストは抽象的なので、どういう文法や語彙が各レベルで使うのかということは、さまざまな世界的な研究が行われています。詳細は言いませんが、British Council の Core Inventory for General English、それから Cambridge English Assessment が中心でやっている English Profile。Pearson、これは教育サービス会社ですが、Pearson のやっている GSE（Global Scale of English）Learning Objectives、それから私たちの行っている CEFR-J、Grammar／Text／Vocabulary Profile。こういうもの CAN-DO リストと語彙や文法を結び付けるための作業です。そのようなことをすることにより、CAN-DO リストをより具体的に使えるような資料類を作っているわけです。こういう資料類が具体化していくと、教科書を作ったりすることがとても便利になるわけです。あるレッスンで CAN-DO を行うときに、このレベルであればどの文法と語彙を使うかというような、そういうものがセットになっていれば、教科書はそういうものを中心にタスクやシラバスを作っていくことができるわけです。そのようなことを設計していくことがきちんとできれば面白いわけです。

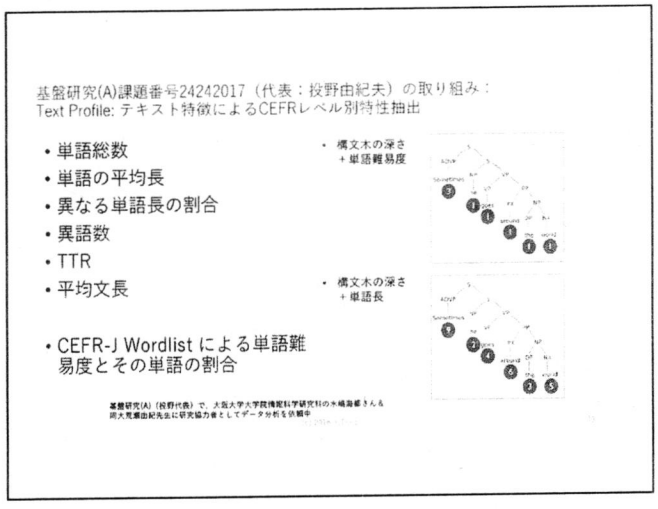


これは私たちが行っていた科研の取り組みで、全部で 500 くらいある文法事項を CEFR レベル別に集めたコーパスデータです。これはヨーロッパで出版されている CEFR が発行されて以降に作られたコ

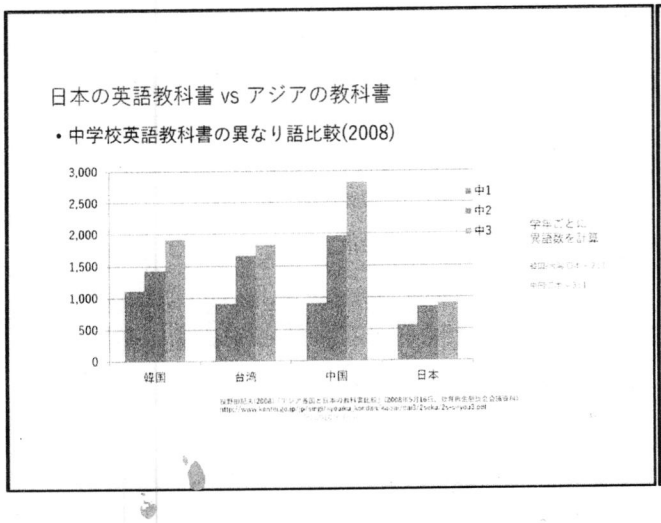
ースブックを大量に集めたものですが、そういうようなものから全文法事項を自動抽出する式を作りました。それで、パターン検索して、テキストから頻度を取り出して、それが大体どのくらい満遍なく各コースブックに出てくるかを測るのです。頻度とレインジというのですが、頻度とどのくらい満遍なく出てくるかというレインジを掛け合わせると、有用度指標、ユテリティーメジャーというものを作ることができる。それによって、この文法の役立ち度のようなものを測るのです。そしてそれがレベルごとにどのくらい特徴的かということを機械学習という方法で特定するのです。そのようなことを我々は研究しています。そういうような作業を経ると、どんな文法が、どのレベルで一番よく出てくるか、重要かということを仕分けていくことができます。文法事項のプロファイリングと言いますが、そのようなプロファイル用の研究をしています。

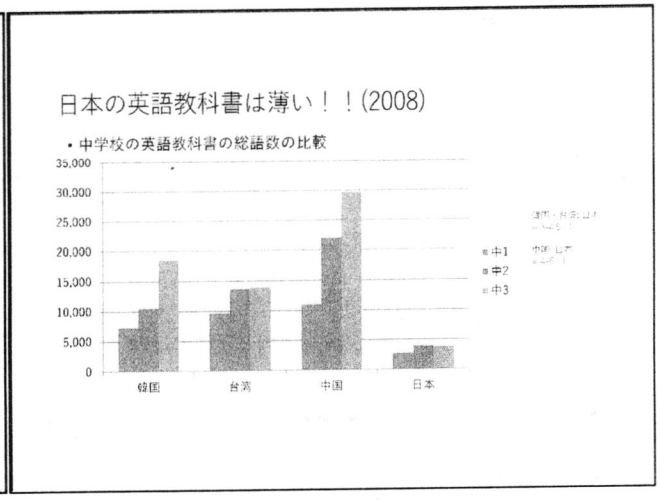
同じようにテキストのプロファイリングもしています。レベルごとに、どのくらい長い複雑な語彙レベルの難しいテキストが必要かを、それぞれのレベルごとに研究して、そういう特徴量を仕分けるような作業をしています。

こういうものを基にしたプロファイリングの資料ができてくれば、先生方は、その結果を基にCAN-DOと文法と語彙を上手に組み合わせたような資料類を活用することができます。これは今、過渡期ですけども、今やっているところです。ですからもっとCAN-DOは使いやすくなるというわけです。

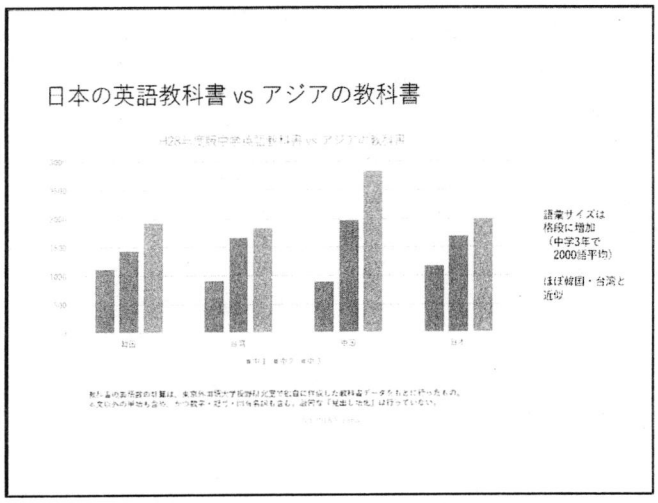


理由の5つ目、英語教科書の品質管理が必要ということです。品質管理はどのような点で必要かというと、今まで私が行っていたコーパス分析の結果を見てみると、一昔前の、前回改訂の学習指導要領の





前までは、日本の教科書はかなり量が少ないということで有名でした。他の隣国の英語教育の中学校の教科書に比べると、日本は異なり、語数でも、それから相互数でも極端にテキストの分量は少ない。これはもう隣国では小学校の3、4、5、6年生、4年生からが多いですが、もう正式な教科として英語をやっていますから、小学校でやっている分、向こうのほうが先を進んでいるわけです。小学校の教科書分析、私は隣国の3地域、台湾、中国、韓国を分析してみましたが、彼らはもう日本の中学校で習っているレベルの英語を既に小学校でやっています。それが現実です。ですから、彼らは一通り小学校で行ったものを、また中学校で行っているわけです。



これは平成28年度に改訂になった、つい最近から使われ始めた教科書です。皆様は、少し難しいプログレスなどを使っている学校もあるかもしれませんが、改訂で、中学校の語彙サイズは各段に増えました。週1時間増えたことにより、教科書も厚くなり語彙も増えています。ですから、中学校のレベルくらいは、今かなり他の国に拮抗してきています。

悪くはないけれども、難しくなっているということも事実です。中学校からいきなり始めている子どもにとっては、少し荷が重いくらいな分量になりつつあります。だからここは小学校に下げて、上手にテイクオフさせてあげないと落ちこぼれが増えてしまうということです。

しかし量は増えたのですが、私の分析によると、まだまだ問題があります。何が問題か。一番重要な基礎語彙のカバー率が低い。例えば語彙が900語から1,200語になりました。実際見てみると、難しい教科書だと、中学校は2,000語近く出ている教科書もあります。付録とかすべてを入れてですが。かなり難易度の高い単語が中学レベルで出てきています。私たちの作成したCEFR-J WordlistのA1からB2レベルの単語ですが、A2レベルまでで大体2,400語あります。そしてB1レベルまでで5,000語くらいあります。B2レベルで、それに加えて7,500くらい出されます。中学教科書の出現単語数見ると、1,000のうち、これは6社全体ですが、770語。つまり6社全体ですから、6種類全部を使えば7割くらい勉強ができるということです。それでも3割は足りていない。A2レベルの単語は半分くらいしか出ていません。それに比べてB1やB2レベルの単語は結構出ています。つまり中学校のテキストは、語彙コントロー

教科書の課題：語彙制限がないのでバラバラ

- 語彙900語→1200語：実際は2000語近くに増加
- かなり難度の高い単語が中学レベルで出てきている：

CEFR-J Wordlist	中学教科書の出現単語数	カバー率
A1 レベル語彙　(1068)	770	72.10%
A2 レベル語彙　(1359)	632	46.50%
B1 レベル語彙　(2359)	591	25.05%
B2 レベル語彙　(2713)	541	19.94%

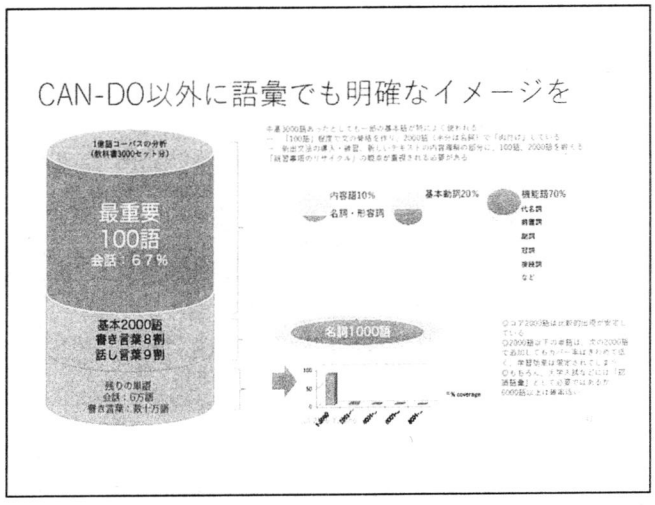
教科書の課題：出てきて欲しい単語が･･･

- ただし、選定されている語彙には統一感がない
- 中学で出てきてほしいA1レベル1000語余りのうち、
- 7種の教科書で共通する単語は343語
- 中3で平均2000語出ていても、共通する語は413語

ル自体はされているとはいえ、やはりトピック依存の単語などで難しい単語が結構出てきてしまっています。その辺のことを勘案して、どういう語彙をきちんと最初に仕込むかということを、きちんとした判断がある程度できるようなほうがよいし、教科書はもう少し語彙コントロールをして作ったほうがよい。だから中学校も高校も時間数が増えて語彙数が増えたので、比較的、基準のないままに量を増やして、語彙としては拡散している感じです。そのような現状なので、こういうところのコントロールはきちんとしていかないと、生徒たちには少し難しくなってしまうということです。

CAN-DO を使いこなすために、先生方に私がぜひ知っておいてほしいことが幾つかあります。これは CAN-DO だけだと何となく漠然としているのですが、英語を身に付けるときの最も重要なエッセンスになることです。これを私のコーパス分析の結果から幾つか紹介します。ここは私の講演を過去にお聞きになった先生がいらしたら、少し重なってしまうかもしれませんがご了承ください。

CAN-DO 以外にボキャブラリーでどういう力を付けるかということは極めて重要です。なぜならば、新しい CEFR などを小中高でということを聞いていると、大変違う教え方しなければならないようなのですが、我々英語教員は、どこに力点を置くかということを見失なってはいけないのです。力点を置くのは、はっきり言って、ものすごく限られた語彙の力なのです。



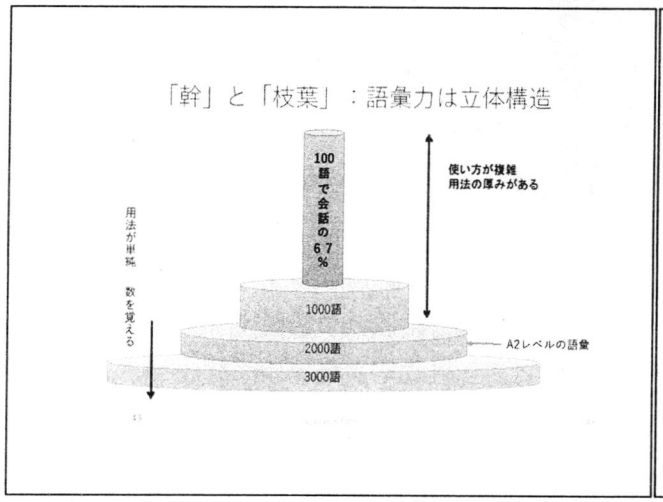
話し言葉の会話データ 1,000 万語を分析して、その内容を見たものです。私が十数年前に NHK の『100 語でスタート！英会話』というテレビの番組に出たときに調べたことですが、最もよく使う 100 語が会話データの約 7 割近くを占めます。トップの 100 語です。そのトップの 100 語の内訳は、基本動詞 2 割と機能語 7 割。つまり動詞と文法機能の強い単語です。この基本動詞 20 個くらいと機能語 7 割くらいで、我々は文の骨組みをつくっているわけです。言いたいことを動詞にマップし、英語の動詞を選び、そこに枠をつくっているのです。その枠に入れる名詞は 100 語の中にはほとんどないです。10%もないです。その次に出てくるのです。基本の 2,000 語、ここが極めて重要です。2,000 語の半分が 1,000 語の名詞です。

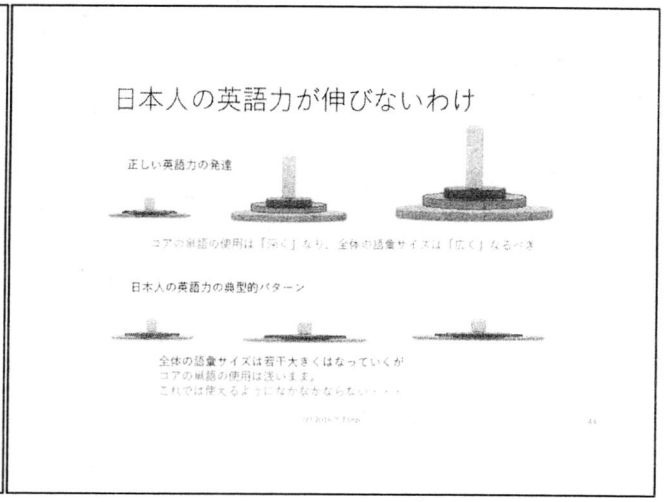
つまりイメージとしては 100 語くらいで骨組みをつくって、その名詞の主語や後ろの目的語、あるいは前置詞句の中の名詞あたりにどんどんいろいろなものを投げ込んで、いろいろなことを言っているのです。これが我々の英語の表現の仕方、英語という言語の仕組みです。ネイティブ・スピーカーは、この 100 語の使いこなしがあまりにすごいので、こんなに分量が出てくるのです。我々が十分使いこなせないような、そういうかなりいろいろなことを 100 語くらいの単語で実現しているのがネーティブの英語なのです。我々が全部知ってる単語ですが、使いこなしていないということなのです。ですから、我々はここのところをしっかり押さえたいと思います。

残りの単語はさまざまな単語がありますが、あまり一生懸命に覚える必要ありません。なぜならば、こちらに出ているようにトップの 2,000 語のカバー率はスピーキングだと 9 割、そしてライティング、Written Text、書き言葉のテキストだと 80%です。

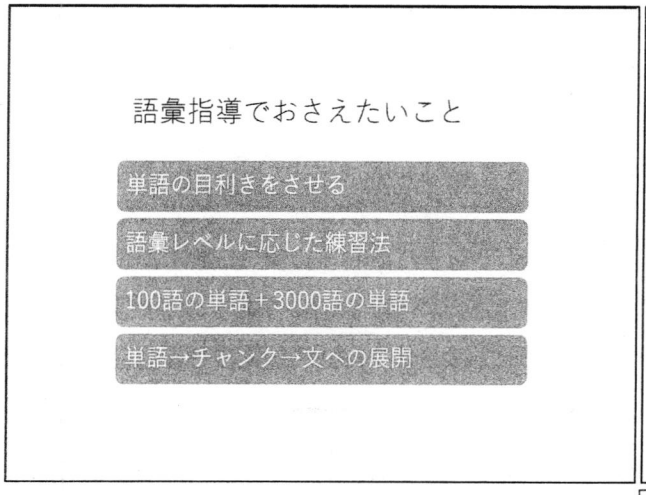
これはケンブリッジのデータですが、80%カバーした 2,000 語から、もう 2,000 語加えてもカバー率は 4%くらいしか上がりません。つまりトップの 2,000 語の仕事量です。それがあまりにすごいので、

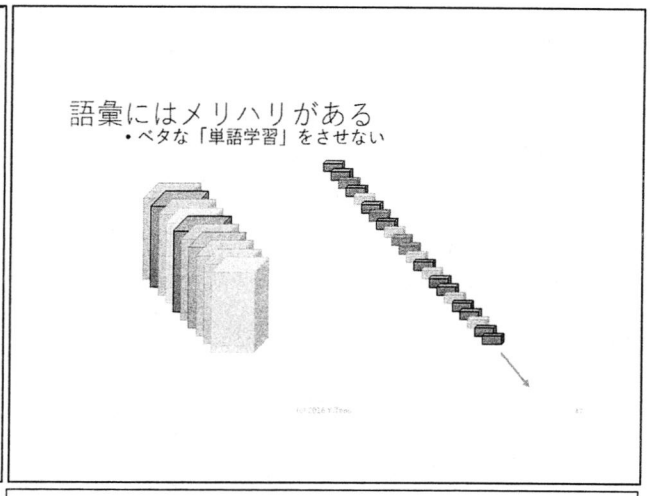
そこから先は、少しです。ですから、とても重要なことなのですが、この 2,000 語を使えるようにしなければ英語力は付かない。どんどん難しい単語にいって、高校でどんどん難しい単語を暗記させている先生がいますが、基の 2,000 語がきちんと使える指導をしていなければ使えるようにはならないし、読めるようにもなりません。





ですから、ここは逆転現象が起きないように、あまり語彙サイズばっかりを考えて 6,000、8,000 とかにいかないように、まずこの大きなイメージをきちんと持つことが大事です。そしてこの部分がしっかりしていれば、こういう立体的なモデルになります。つまり中心の 100 語くらいの使い方を深く学んでいき、徐々に語彙サイズを増やしていく。これが発達のイメージです。真ん中は知っている単語ですけれども、知っている単語が使えないということが現状にあるので、ここを繰り返し繰り返し、戻ってきて教えて、言語活動しながらいろいろな 4 技能に出てくるようにしてあげるようにする。そのためには自力が付くような指導が必要です。





現状では、日本人は、いつも真ん中あたりが伸びずに、周辺が少し広がっている程度です。これでは絶対に英語の力は付かないわけです。

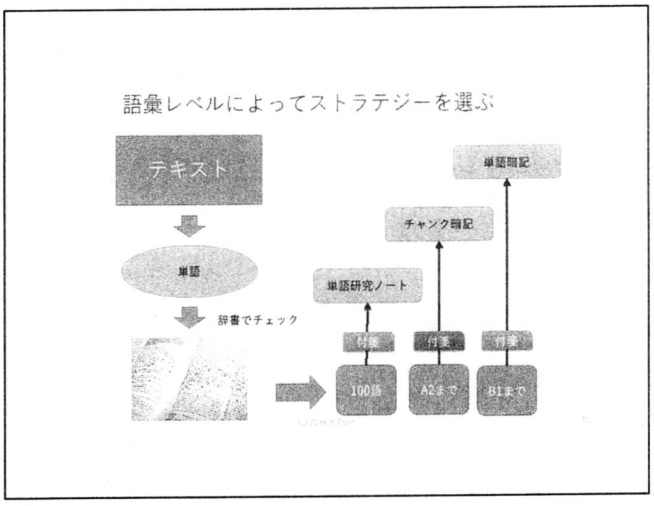
CEFR を使って CAN-DO で、といっても、語彙指導の基本は大きく分けると 4 つくらいのことになります。言葉を使ってできることに進む前に、このあたりの語彙指導の根幹を押さえておかないと駄目だということです。

単語の目利きを正しくする

- **最重要の１００語：**
  常に使い方を中学・高校・大学と学び続ける
- **トップ２０００語（または A2 レベル 2400 語）：**
  active vocabulary として発信能力をつける
- **残りの単語：３０００語＋α**
  passive vocabulart として受信能力をつける

一つ目は、単語の目利きを先生もするし、生徒にさせてあげるということです。語彙にはメリハリがありますので、ありきたりな単語学習をさせないということ。ある単語は、ものすごく情報力が多く使いこなしが深くなっていかなければならない単語。ある種の単語は、ものすごく情報量が少なく意味だけ覚えておけばよい単語。こういうものをはっきり分けます。トップの 100、2,000、残りというような感じで、ザクッと分ける。高校の 1 年生くらいまではこの分け方くらいがちょうどいいです。2 年、3 年になると、もう少し使える単語が増えていくほうがいいですが、現状の指導要領の高校 1 年生くらいの必履修科目がイメージするのはこのあたりのイメージです。ですから、メリハリを付けてください。

語彙レベルに応じて練習方法も変えます。テキストがあったとします。何でもかんでも語彙を新出単語だからって全部覚え込ませている先生がいます。今でも中学校では涙ぐましい努力をして単語テストとかを行い、それでできないと、その日に残して 100 点満点が取れるまでテストをさせたりしています。その日に 100 点が取れても単語はすぐ忘れてしまう。ですから、その努力をすること自体に意味があるかどうかは分からない。テキストがあったならば、先生方は単語の目利きもしてほしいし、生徒にもする方法を教えてあげてほしいです。2,000 とか 3,000 という単語数が、どのように測ることができるかは、後で資料をみますが、とにかく単語は 100、2,000、それ以外くらいで分けれたほうがよい。



100 語くらいの単語というのは私立学校には、私はよく「単語の研究ノートを作るように」と言います。CAN-DO とかなり違うかもしれませんが、基礎語彙が何かということについて、とにかく生徒に自覚させるようなものです。これは中学校で始めるときからやったほうがいいです。どういうことかというと、すごく簡単なことです。例えば月間でやるような単語を決めておくのです。トップの 100 語のうちの 20 くらいの動詞から 1 つ、前置詞、それからあと接続詞か助動詞あたりが 100 の中でとても重要なものなので、その辺から 1 個くらいを月で選んでおきます。そしてテキストの中で、その単語が出てきたら、ただその単語のページに英文を書いて訳しておくだけです。例えば make なら make で、中学校なら大学ノートに 2 ページくらい見開きで場所を取っておきます。make のページ、take のページ、それから have のページとか。その月間で、自分で、その先生たちでも決めてあげてもいいし、自分で決めたものでもいいので、特集する単語を決めておいて、その特集単語がテキストに出てくるたびに、研究ノートに例文を書かせます。最初は例文を書かせているだけですが、少し経ってから、それを辞書で再構成するようにします。辞書で例文を見て、どのような意味だったか番号を付けさせたりするのです。そのように辞書指導を少し噛ませてあげて、単語を自分で整理するような癖を付けさせます。これを何十分も時間かけてやるのかと思うかもしれませんが、これはもうきっちりとやります。とにかくメモみたいなものです。自分で、「これとこれを今日つけておこう」というような感じで、授業の合間でもいいし、休み時間でもいいし、家に帰ってからでもいいのです。そのような癖を付けさせるということです。こうすると生徒たちは重要な単語がどういうもので、よく出てくるということについて、たくさん触れる中で、単語への関心が高まってくるのです。こういうことを先生たちはいちいち授業ではできないです。だから生徒たちが自立的にやるように教えてあげるわけです。このような勉強法を一緒に教えてあげることが、

先生の指導の一貫としては非常に重要です。A2 レベルくらいまでは 2,000 語なので、出てくるようにしないといけません。ですから、こういう単語については後ほど言いますが、チャンクの固まりで発信できるようにトレーニングをしてあげたほうがいいです。そして、それ以上の B1 レベルくらいまでの 5,000 語レベルは、これは単純に覚えればいいのです。5,000 語レベルより下の単語は忘れていいです。

教科書本文を「語彙」の視点で見直す

- If the mosquito likes you, she lands on your skin very gently, and she breaks it with her proboscis tip. Proboscis tip ? What's that? It's a kind of mouth and it is just under the mosquito's eyes. It contains six sharp instruments called stylets. She pushes all six stylets into your skin at once, and if she hits a blood vessel, she'll get a full dinner in about a minute. All this usually takes place so quickly and quietly that you may not have noticed anything was happening.

From *Vivid* 2

黒：A1 緑：A2レベル　青：B1レベル
赤：Cレベル～1万語レベル以上

ある教科書の語彙分析をしたものですが、これは私がよく講演で出している文なのですが、蚊が血を吸うというところなのです。『Vivid』という教科書から出してます。この文章を読んだときに皆さんパッと分かると思いますが、proboscis という単語です。これは普通、知らないです。これを知っていたら、語彙レベルの大変高い人だと思いますが、これは蚊の血を吸うところです。これ、蚊の血を吸う名前がキスの接ぷんの「ふん」というほうなのです。それが専門用語です。私も使ったことがないくらい珍しい単語です。それが、この高校の教科書で出ています。この教科書を指導したときに、この単語を覚えさせるかという話です。これは私だったら、「この単語は非常に珍しい単語で、たまたまここで出てきただけだから、これがまた出てきたら、電子辞書で引きなさい」というくらいのことを言います。

つまり proboscis や stylets（口針）は 1 万語レベル以下の単語です。ですから、これは頻度的には極めて珍しく、たまたま『Vivid』の、このレッスンで蚊の血を吸う生体についてのテキストを習ったから出てきた単語です。このような単語は多くの高校教科書であります。先生方がこれらの単語を全部テストで出題して新出単語で覚えさせると、かなり罪深いです。というのは、重み付けができないままテストをして、生徒たちは全部覚えなければいけないと思い、死にもの狂いで覚えて 6 時くらいまで家に帰してもらえないというようなことをやっているとすると、やはりメリハリが必要だと思うのです。

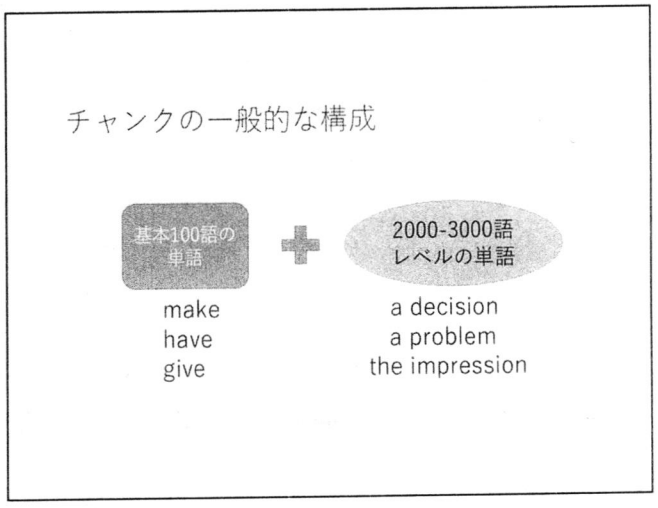
逆に大事なのは、proboscis や stylets のような単語ではなくて、What's that?の部分です。実は私たちは、この蚊の生体のような、リーディングのテキストとしてしっかり読むようなものは、リーディングスキルとして付けてあげます。それはよいことなのです。だからそこに難しい単語があっても構いません。難しい単語が分からなくても、What's that? の後を読めば説明が書いてあるので読み取れます。こういうリーディングの力は自然に付けてあげます。

次が問題。オーラルで行う場合に、このテキストをそのままシャドーイング、リピーティング、そういうことしか行っていない先生がいる。オーラルというと、とにかく音読。私は、これはあまり賛成しないです。音読は悪くないのですが、音読はスピーキングへの橋渡しとしてはいい活動ですが、こてこての書き言葉のようなものをたくさん音読させるのは、あまり良くないです。これを音読させるなら、少しサマライズしたようなものを音読させたほうが、ずっと良い。なぜならば、「これを読んで自分で大体概要を言ってごらん」というような練習が本当は必要で、それができない一歩前で音読させるというのは良いことなのです。だから、ステップを考えると、単なるシャドーイングというのは、少しきついかなと私は思います。

スポンテニアスな即興的なオーラルワークであればどうでしょうか。このテキストで一番重要なの

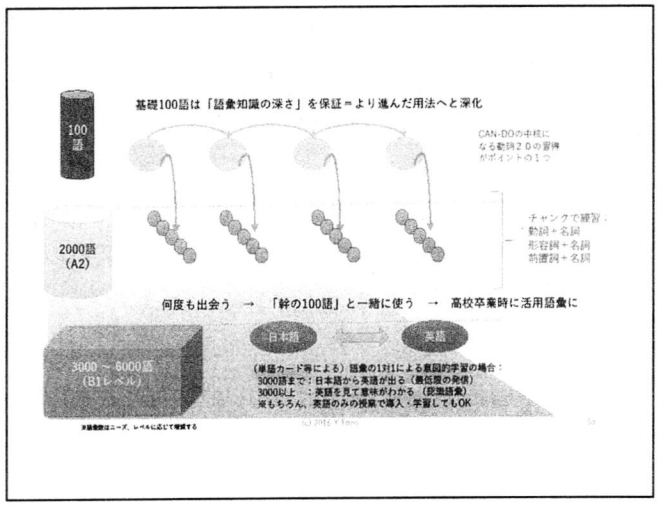
は、この What's that の後の数フレーズ、この数フレーズだけはリーディングのテキストから取り出して、普通のやりとりとして行えば良いです。ですからこのように、素材はもともと何かということを基に、これはスキル別であれば、どう取り出して、どう料理するかということは先生の腕次第です。そこで語彙レベルをレセプティブなスキルを磨くか、プロダクティブに磨くかというようなもののメリハリを料理人として判断するのです。そこは極めて大事です。そこに、先ほど言ったような語彙レベルの知識や想定される CAN-DO のスキルのようなものがイメージされていると、料理の仕方もよりおいしくできるわけです。

次にチャンクの話です。先ほどお話しした 100 と 2,000 語、3,000 語の単語は、実は大変関係しています。20 くらいの動詞が、なぜたくさん出てくるかというと、20 の動詞はそれ以外の数千語レベルの名詞とくっついて使うからです。ネイティブ・スピーカーでも我々でも、この単語のリスト、名詞のリストを見たときに、make、take を隠していても、かなりの人が推測がつきます、一定の英語力があれば。例えば object、decision、use、sense、defference などの前にどんな動詞が来ますかと聞くと、大体の人は make と答えます。なぜですか。それは、その単語と make の共起している、一緒に起こっているパターンにたくさん触れて、頭の中に能力として身に付けているからです。こういうことをコロケーションの知識といいます。不思議なことに人間は、文法でバラバラに単語を組み合わせているだけではなく、自然な組み合わせを覚えているのです。そして他の人が自然な組み合わせではないことを言うと、変だと思います。こういう感覚の言語能力というものはチャンクで覚えないと、なかなか仕込めない。

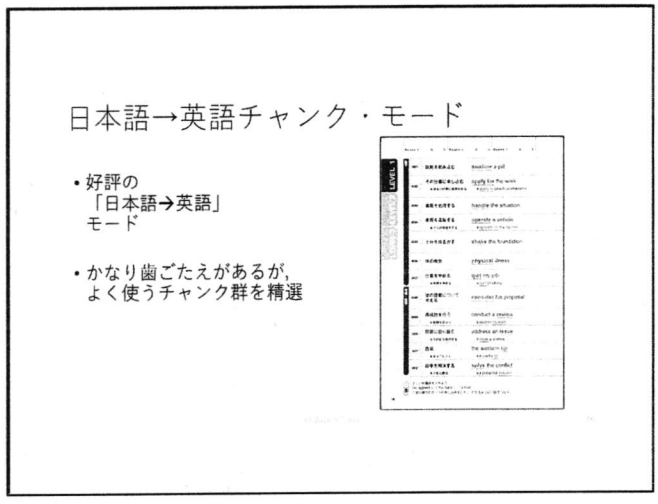


ですから、チャンクで覚えるということ自体はとても意味のあることです。基本の 100 語くらいの単語と、それに一緒に使う名詞を組み合わせると、自然なつながり具合が身に付くことに加え、基本 100 語の単語の、「このように使うんだ」という部分で基礎語彙の知識も深まるのです。ですから、チャンクというものは、単語を 1 個ずつ日本語と英語で覚えているだけであると、100 語の単語の有り難さがあまりよく分からない。ですから、できるだけ組み合わせて自然な日本語で訳せるものを行ったり来たりする。そのような練習が、大変大事です。このあたりは私がコーパス分析をして、そしていろいろな語彙の資料を見ながら、このようにしたほうがいいと考え、だんだん気が付いてきたことなのです。このことについては、「発信力をつける英語語彙指導」（2015 年、投野由紀夫著、三省堂）にいろいろ書いてありますので、ぜひご覧になって下さい。チャンクに関するトレーニングの単語については「クラウン チャンクで英単語 Basic」・「クラウン チャンクで英単語 Standard」（2015 年、投野由紀夫編、三省堂）をセットで出しています。またそれ以前に東京書籍から 3 種類出しています。東京

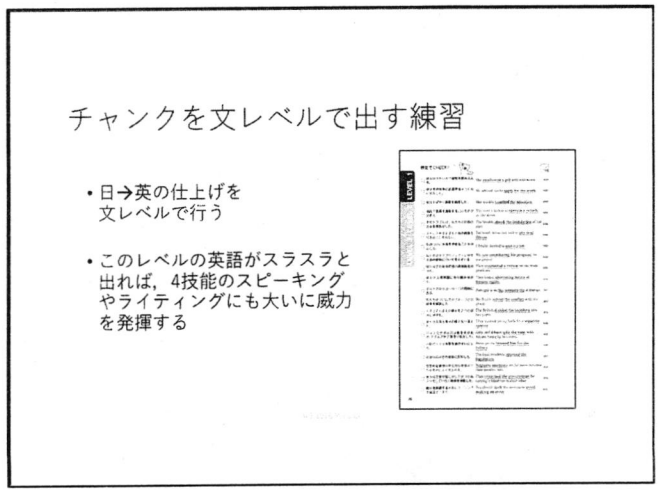
書籍の方に三省堂から出したときに「先生、困りますよ、同じ単語集出されちゃうと」と言われましたが、同じ単語集ではないです。「チャンクで英単語」は日本語と英語になっています。全部のリストが日本語と英語です。ですから、そこがかなり違うのです。開けた瞬間に、発信用の単語集として作られています。語彙も、それ用に少し絞っていて、「発信できるならこういう単語で、こういうチャンクで出そうね」というようなことです。



だんだんまとめに入っていきますが、我々はこのようにレベル別の単語の重要度に関して知る必要があり、その重要度に応じた練習方法をうまく自分たちのトレーニングメニューに組み入れてあげる必要があります。この辺がビルディングブロックになって、それを基にして、先ほどの CAN-DO のタスクを実現するような表現群が、仕込まれるのです。このような部分のリンクをきちんと付けていない言語活動は、タスクを作ったときに語彙コントロールや語彙の仕込み、あるいは語彙の練習をやっていないので、タスクを与えても生徒たちはあまりしゃべることができません。だから、まず仕込みの段階で、しっかり仕込む方法を考えるのです。その仕込みは先ほどのタスクのような機能と、それが表す言語表現、その言語表現は、どのようなセットで行われたら良いかということについての先生の設計図によるわけです。このあたりを教科書から分析して判断できるような力が先生の技能としてあると素晴らしいわけです。

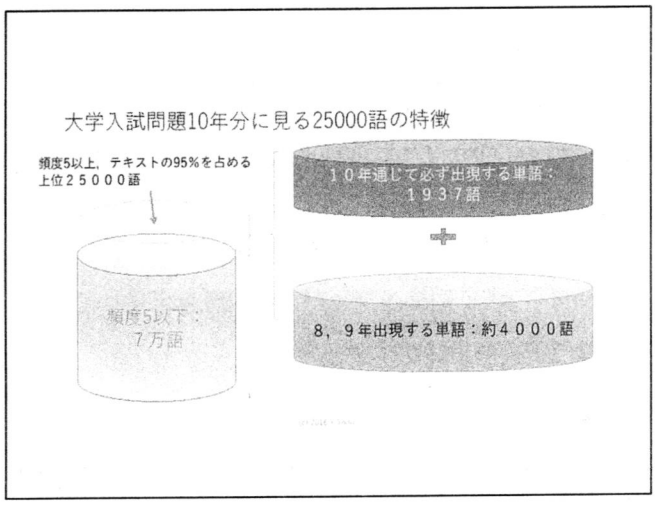


これは先ほどの日本語と英語のチャンクの例です。ぜひ日本語から英語で、チャンクで出すというようなことを考えてやってみていただきたいと思います。チャンクができるようになれば、文レベルにします。チャンクを文レベルで出すようなモードで練習します。そしてその文レベルが、CAN-DO を行うための会話の場面の一番のキーフレーズになっているように仕込んで、そしてタスクに移行していくということです。こういうことができると良いと思います。この辺りは、ぜひ考えてみると良いと思います。いずれにせよ単語やチャンクというものの目利きをして、それが読んで分かるだけでよい単語と、それからあと出てくるようにしなければいけない単語をはっきり分けて、そして出てくるような単語については練習方法を教えてあげて、出てくるようにしてあげた上で使ってみるというところまで授業の指導の中でやるわけです。全部は、その生徒に一個一個できない。そこは練習方法を教えて自分でやらせるこ



とです。先ほどの単語活用ノートもそうですが、そのような語彙指導は、やり方、ストラテジーを教えてあげて、生徒が家で行える方を行うのです。なかなか能力がなくてやってこないという子どももいるかもしれないけれど、生徒たちは、やり方が分かれば面白くなります。しっかりやり方を教えてあげてください。

そして逆に、できない子に、できないところのレベルまで下がっていって、CAN-DO でいくと、「あなたはこのくらいなんだ」ということで、そこからもう一度やり直すメニューを作ってあげるといいです。そのような底上げの指導のようなものも CAN-DO があるとできるようになります。ですから、小中高の高校のレベルにいるけれども、実は中学校のものしかできてないという子どもがとても多いわけです。そうであれば、あまり無理をしないで中学校のレベルのことをある程度、もう一度復習するような、上手なタスクを組み込みながら、半分くらいはそういう復習的なことをしっかりやりながら、また回していってあげるというようなこともできるかもしれない。そのあたりをどのように授業中にやるかというのは先生の、少し難しいところではありますが、工夫の余地のあるところです。

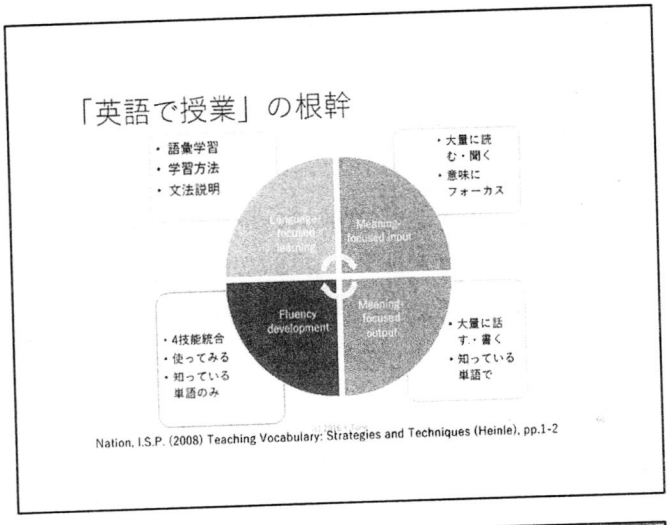


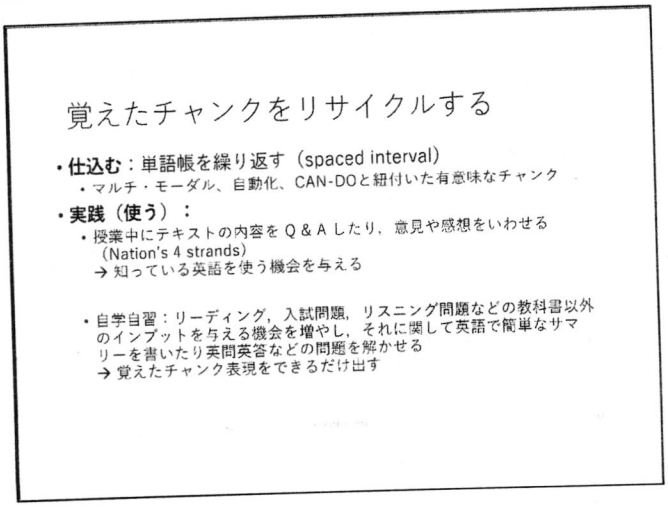
最後に、入試絡み、出口のほうの話をします。出口は、今、いろいろ、委員会で話されていますが、私が語彙分析をした後で、入試問題のコーパスを調べました。入試問題のコーパスは過去、いろいろな研究をしているのですが、10 年分くらいのデータを各年度 500 校くらいの大学の学部のテキストを集めて分析したことがあります。ここの頻度 5 以下とはどういうことかというと、500 学部のうち 5 回ではなく、10 年ですから 5,000 学部のうちに 5 回しか出ていない単語を削っています。先ほどのさっきの proboscis なみの単語です。これは要らないです。トップ 2 万 5,000 語くらいになります。これでも多いです。これで頻度 5 以上がテキストの 95%を占めます。そのうち 10 年続けて 500 学部のうち 1 学部だけにでも出ていれば、出ていると仮定した単語で絞り込むと、10 年連続 1 回でも出ている単語は 1,937 語です。つまり先ほど言った 2,000 語レベルの単語くらいが、やはりずっと出ている単語になっているわけです。それ以外は取っ替え引っ替え、いろいろな単語がテキストごとに出てきます。生徒にとっては、そこは覚えても覚えても、なかなか難しい。少しランクを下げてあげて、最低でも 8、9、10 年に出ている単語だと、プラス 4,000 くらい。これくらいまでが覚える甲斐のある単語です。それ以外は覚えても覚えても偶然出てくる単語になってしまいます。偶然出てくる単語はどのくらいかというと、大体 20 語に 1 語くらい偶然出てくる単語になってしまいます。そこはもう私の意見では無理しないと。ここをたくさん果てしなく覚えていくのであれば、最初の 2,000 語をしっかり使えるようになったほうが、読み切れて、問題の答えもきちんと答えられると思います。ですから、決して入試問題の難しさのようなものに振り回されすぎないほうがいいです。もちろん難関校などは相当難しいテキストは出てきますが、最近の東京大学の入試をご覧になってみると分かると思いますが、かなりバランスの良い問題です。技能にかなり振り分けていて、そんなに難易度も極端に難しくはないです。京都大学だけは、かなり変わっていますが。京都大学だけは入試のいろいろなことに反発していますが、非常に特殊な例です。ですから一般的な学部の入試は、先ほど私が言ったような感じの力がきちんと付いていけば対応できると思います。

仕込みと実践ということで、発信型の技能のCAN-DOには必須の基礎語彙と表現をセットにしていくと良いです。ですから私たちが今やっていることは、具体的なCAN-DO、例えば誰かを招待したり誘いに応えたりできるような、こういうインビテーションのようなCAN-DOに対しては、それにひも付くようなさまざまな表現をレベル別に整理するようなことをしています。このようなものがあると、CAN-DOでは、このレッスンはパーティーに招待しているような場面だと言うと、そういうCAN-DOを基にして、どのような表現を学べるかということをレベルを見て選び、そこをうまくタスクに盛り込んだようなもので応用のタスクを作るということがしやすくなります。

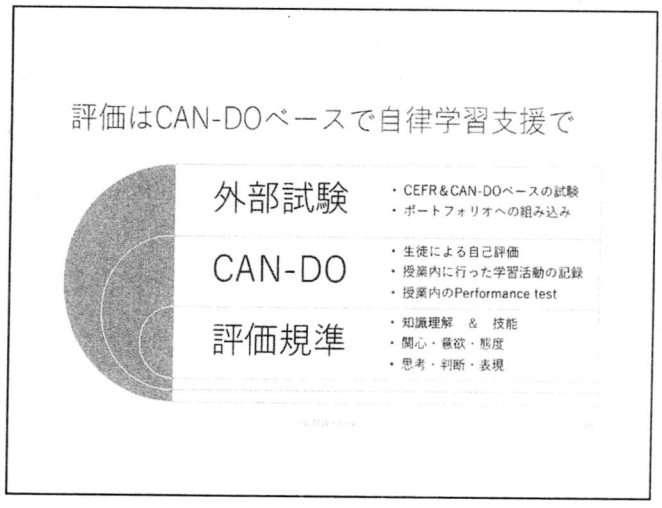
こういうCAN-DOと文法語彙表現のセットを上手に利用するように、今後はなるはずです。ですから先生方も今、CAN-DOというと、少し分かりにくいなと思うかもしれないけれども、だんだんこういう肉付けがされて、こういう資料を使えるようなものが教科書会社もこれから出してくると思うので、それを利用して、うまくコミュニケーション活動に結び付けていってほしいと思います。そのときも大事なことは、先ほどの基になる仕込みの表現です。ここをきちんとしてないと駄目だということです。

ポール・ネイションという人が語彙の本を書いていますが、非常に私が感動することを書いています。大きく分けると、皆様の授業の時間配分はどうなっていますかということを彼は書いています。彼は4つに区切って、時間配分をこのくらいにしたほうがいいと言っているのです。先ほど私が語彙の学習のやり方を説明、文法の説明、学習のいろいろなやり方についての説明は4分の1くらいです。先生方の授業で説明は4分の1くらいになっているかということを少し考えてみてください。残りは何をするのでしょうか。Fluency developmentの部分は新出事項などをなるべく自動化、パッと出てくるようになることを高めるトレーニングです。それ以外の2つが驚くべきで、この2つは何かというと、大量に読む・聞く、大量に話す・書く。それを、意味を中心として行うということです。つまり、あまり形のことが意識されないような感じで、意味にフォーカスをした活動をする。その心は何かというと、既に知っている、身に付いているか、習ったことのある語彙と文法でやるということなのです。だから半分く





らいは新出のレッスンですが、新出事項に全部時間をかけないということです。既習事項を使う練習を新出の素材でするということです。先ほどの蚊のテキスト思い出してください。新しい単語が多く出てきていますが、そこを扱うのが半分。半分は蚊のトピックで習った英語を使う機会を考えろということです。そこのところがなかなか難しいですが。知っている単語だけれどもなかなか使えないということを、使うチャンスにするような工夫をレッスンの中に上手に盛り込んでいくというわけです。これがリサイクルの発想です。覚えたチャンクを仕込むだけではなく、実践でさまざまに使ってみる。授業中にテキストの内容を先生がQ&Aや意見・感想を言わせる。知ってる英語を使う機会を与えるということです。かつ自学自習でリーディング入試問題、リスニングなどの教科書以外のインプットを与える機会を増やしてあげる。それに関して英語で簡単なサマリーを書かせるとか、英問英答などの問題を解かせる。これは覚えたチャンクをできるだけ自分で出してみる機会です。ですから覚えたものを使ってみるような自習の仕方をさせるように、語彙指導とリンクしていくようにしてあげたらいいということです。



最後、評価はCAN-DOベースになりますが、自律学習を頭に入れてやっていきます。今ある評価の基準が今度改訂されますが、思考力、判断力、表現力のような部分を見ることと、知識、技能の部分はCAN-DO、そして外部検定試験のようなものをうまく組み合わせて、生徒がどのように普段、教室内で学習しているか。目標となっている、できることはどのくらいできるか。それを客観的に外部試験などで裏付けられるか。そのようなものをうまく使って、生徒の力を全体的に伸ばしてあげるようなものです。それで最後はB1レベルのThresholdレベルになると、あるいき値を超えて、「先生ありがとうございます。先生に教わったので私は1人で勉強していけます。」と言うようになる生徒に育てるということです。先生たちがやるのは、自分でパフォーマンスをしてショーをすることではないのです。一人一人の生徒が自律できるように育ててあげるということです。だから勉強の仕方を教えることはとても大事です。自分で勉強していき、自分のレベルで自分のニーズに合った英語をどこまでやるかを決められるようにしてあげるのです。そういうことが、その次のステップの大学へ進んだときに、とても役に立ちます。ですから、ぜひそのような視点でCAN-DOも一部、自分のテクニックとして使えるようにトレーニングをして下さいということです。

まとめです。GOAL2020、これは次世代の子どもたちを守るための英語教育だと国は考えているのです。大変ですけれども、一生懸命いろいろなこと話したりしているのは、やはり次の世代を考えると、私たち、先生たちが今、なんかしないといけないところです。

次に、今の英語教育の方法を「英語を学んだら、使えるようになる」。学んだ内容を単に教科として学んだり知識として学んだりするのではなくて、英語というのは使えるようにならなければいけないということです。そのためには明確な目標の設定と、明確な英語力のイメージ、CAN-DOで目標を決め、先ほどの語彙力のイメージのようなものがしっかりとあって、言語材料の目利きのできる先生になってほしいです。

最後は仕込みとリサイクル。きちんと仕込まないと出てきません。仕込む時間をきっちり与えリサイクルすることで、どんどん使わせていく。これを繰り返すことにしか、言語というものは習熟する方法はないです。それを楽しくできればもっとよいのですが、この部分は努力が必要です。努力をしたら必ず報われるということを教えてあげながら、ここは必死でやるしかないです。クラブ活動、合唱コンクールとかを小学校、中学校とかではやります。それと同じようなトレーニングが、英語でできないわけはないのです。けれども、我々はそういうところは手を抜いているのです。ですからきちんとトレーニングをしてあげるというような先生側の気力が大事です。そういう部分をぜひ先生方もイメージしながら、自分の生徒だけは最低、責任を持つという、そういう先生になってほしいと思います。